

北日本漁業経済学会 ニユ一ズレ多一

第38回 福井県小浜大会報告

2009年10月9日(金)、10日(土)の両日にわたり、福井県小浜市・福井県立大学小浜キャンパス交流センターにおいて、第38回北日本漁業経済学会大会が開催されました。

今大会では「日本海におけるカニ資源の漁業管理と地域漁業構造」と題してシンポジウムを企画し、2日間で延べ60数名という参加者を得て、下記の通り、シンポジウム、一般報告、総会および懇親会を滞りなく実施することができました。シンポジウムのコーディネーター及び報告者として、また大会運営の要となる現地事務局としてご尽力頂いた福井県立大学の加藤辰夫、東村玲子両氏をはじめ、報告者、参加者及びご協力頂いた全ての皆様に厚く御礼申し上げます。また、本大会には福井県立大学、北海道漁業協同組合連合会の後援をいただきました。ここに記し、改めて謝意を表します。

シンポジウム (10/9)

共通論題：『日本海におけるカニ資源の漁業管理 と地域漁業構造』

コーディネーター：加藤辰夫(福井県立大学)

〔講演者〕

1. シンポジウム解題

加藤辰夫(福井県立大学)

2. 兵庫県のズワイガニ漁業とベニズワイガニ漁業

中岸明彦(兵庫県但馬水産事務所)

3. 福井県のズワイガニ(越前ガニ)漁業

安達辰典(福井県農林水産部水産課)

4. 個別割り当て(IQ制度)とその合意形成

- 日本海ベニズワイガニ漁業を事例として -

中西孝(中央水産研究所)

5. カナダ・アラスカのズワイガニ漁業と加工業

東村玲子（福井県立大学）

コメンテーター：今修（若狭エネルギー研究所）、玉置泰司（中央水産研究所）
古林英一（北海学園大学）

総合討論司会：長谷川健二（三重大学生物資源学部）

懇親会； 18時～20時

会場…「福井県立大学・小浜キャンパス交流センター」内

司会…東村玲子（福井県立大学） 参加者…約30名

一般報告(10/10)

会場：福井県立大学・小浜キャンパス交流センター

1. 北海道におけるアキサケ消費の特徴
ーインターネットアンケート調査結果からー
清水幾太郎・玉置泰司・富塚 叙・棧敷孝浩（中央水産研究所）
2. 韓国における刺身マグロの消費動向の分析
松浦 勉・玉置泰司（中央水産研究所）
3. 地場水産物に対する消費者評価分析
ー横浜市内の直売所を事例としてー
棧敷孝浩・玉置泰司・清水幾太郎（中央水産研究所）
4. アオサ回収による環境保全効果の経済評価
ー福岡市の和白干潟を事例としてー
棧敷孝浩・清水幾太郎・玉置泰司・田坂行男（中央水産研究所）
5. 漁業者による環境保全活動に関する一考察
～琵琶湖における外来魚駆除、水草除去・湖底耕耘を中心に～
清板晃平（東京海洋大大学院）・工藤貴史（東京海洋大）
6. 茨城県におけるアワビ栽培漁業の経済効率と今後の展望
鴨下真吾（茨城県水産試験場）
7. 地先資源回復計画の取組み実態とその課題
ー神奈川県東京内湾海域小型機船底びき網漁業包括的資源回復計画を事例にー
佐藤尚紀（東京海洋大学大学院）・馬場治（東京海洋大学）
8. 秋さけ遊漁料徴収施策の検討方向について
富塚 叙（中央水産研究所）

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

総会・理事会報告

本大会における学会総会は常清秀氏（三重大学）を議長に選出し、10月10日11時40分より、福井県立大学・小浜キャンパス交流センターにおいて開催されました。また、これに先立ち、10月8日には福井県小浜市・働く婦人の家において理事会が開催されました。以下、主な協議内容、報告事項についてご報告致します。

（1）新入会員承認

前回大会以降、新しく鴨下真吾氏（茨城県水産試験場）、棧敷孝浩氏（中央水産研究所）、佐藤尚紀氏（東京海洋大学大学院）、濱津友紀氏（北海道区水産研究所）、神忠志氏、中村彰男氏（秋田県農林水産技術センター）、末永芳美氏（東京海洋大学）の計7名につきまして、入会が承認されました。

（2）学会誌・短信発行計画

本年度も例年通り、学会誌「北日本漁業」第38号を2009年3月に発行する予定としました。内容は38回大会シンポジウム講演論文と一般投稿論文等となります。短信（ニュースレター）につきましては、2010年1月、6月、9月の計3回発行する計画としました。

（3）次年度大会開催地およびシンポジウムテーマの計画

次年度大会開催地・会場については北海道（札幌）とする方向で検討することとなりました。また、シンポジウムテーマにつきましては、ニュースレター等を通じて要望、意見を募りつつ、今後シンポジウム担当理事を中心に検討していくこととなりました。

（4）決算・予算

決算（特別会計決算を含む）につきましては、田尾、山下両監事の監査報告（文書報告）を含め、原案通り承認されました。また、2009年度予算案についても原案通り承認されました。以下に承認された決算書、予算書を掲載します。

（5）学会名簿作成の件

学会名簿の作成については、会員からの名簿掲載事項の提示（住所変更の届け等）がまだ十分ではないようなので、再度ニュースレター等を通じて周知徹底を図り、次期大会までに作成することとしました。

（6）役員改選の件

学会役員の改選を行い、理事23名（うち常任理事8名）、監事2名、特別顧問1名を選出しました。また、選出された新役員により第1回理事会が行われ、互選により会長・池田均氏（元北海学園大学）、副会長・服部昭氏（八戸大学）の両氏が選出されました。以下、選出された新役員の指名・所属を列記します。

<理事> 会長・*池田均（元北海学園大学）、副会長・服部昭（八戸大学）、*宮澤晴彦（北海道大学大学院水産科学研究院）、*上田克之（水産北海道協会）、上田昌行（株式会社・水土舎）、濱田武士（東京海洋大学）、東村玲子（福井県立大学）、*古林英一（北海学園大学）、清水幾太郎（中央水産研究所・さけますセンター併任）、*宮崎隆志（北海道大学大学院教育学研究科）、柳田洋一（茨城県水産試験場）、栗原修（東京水産振興会）、佐藤一（北海道立栽培水産試験場）、杉山秀樹（秋田県農林水産技術センター）、大野宣和（岩手県水産技術センター）、二平章（漁業情報サービスセンター）、*廣吉勝治（北海道大学大学院水産科学研究院）、廣田将仁（中央水産研究所）、山崎誠（水産総合研究センター養殖研究所）、松浦勉（中央水産研究所）、*佐々木貴文（函館短期大学）、三木奈都子（水産大学校）、*副島久実（水産大学校）

(注) *印は常任理事

<監事> 田尾直之(漁協経営センター)、山下成治(北海道大学大学院水産科学研究院)

<特別顧問> 児島修治(北海道信用漁業協同組合連合会)

(7) 事務局体制等

事務局(理事の任務分担)体制については下記の通り了承されました。

総務担当(事務局長); 宮澤晴彦、会計・会員管理担当; 佐々木貴文 編集幹事; 宮澤晴彦、古林英一、宮崎隆志、廣吉勝治 大会・シンポジウム担当; 古林英一、上田克之、廣吉勝治、濱田武士、二平章
--

また、学会誌編集委員の改選を行い、次期編集委員として服部昭、宮澤晴彦、上田克之、古林英一、宮崎隆志、長谷川健二、副島久実、廣田将仁の8名を選出しました。

(8) 学会誌第37号の編集に関わる問題と対応について

学会誌第37号に掲載された論文、中原尚知・本田幸子「サンマの需給構造と市場の変化」に関する盗用疑惑問題については、残された関係者及び筆頭著者へのヒアリング並びに弁明機会の確保を前提として、最終的な判断を会長に一任することが了承されました。

*その後の会長による通知と所懐につきましては、当学会HPをご参照ください。

次回学会大会シンポジウムのテーマについて

大会シンポ担当：廣吉

次期大会の具体的な計画は次の常任理事会（4月予定）で決まることになると思いますが、担当として現在シンポ・テーマは以下のようなものから選ぼうとかがんがえているところです。まだ殆ど決められていない漠然とした段階です。どうか、新しい提案を含め皆さんの意見をください（4月上旬までにメール等で）。

①地域政策としての経営安定対策：「漁船構造改革」においては産地ぐるみ、業界ぐるみでの中小漁業経営支援（設備支援を含む）対策が提起され、従前の金融支援基軸からの脱皮が図られている。実例も挙がってきている。施策の歴史的意義、実態分析と今後にみる検証、評価がねらい。

②「TAC-ABC」に関する制度展開と漁業実態への影響：「ABC-TAC」ラインの政策実施において、当初の提起から今日に至る過程では相当の変化が認められる（管理方策として問題のある論調もまかり通っている）。漁業管理・資源管理から生態系保全の投入を目論む行政もあらわれ、中小漁業諸階層はどのような影響を受けてきたか。またTAC政策の展望と今後の漁業への影響をどうみるか、社会科学の視点から検討する。

③いわゆるMSC問題を論ず：MSCに象徴されるエコラベル、地域ブランド、表示、安心安全など水産物市場を規定する新たな要因とその拡がりの現状、及び評価。こうした要因の全体像をどう押さえたらいいであろうか。

④今日における漁業就業の動向：北海道と東北における高齢漁業者の問題に限定した現状と課題解明に関するテーマ。沿岸漁業経営体の分解と減少のもとで漁村における高齢漁業者の漁業従事、福祉や社会問題のあらわれ等の実態と動向分析。そして、都市の失業人口増加、都市と漁村の交流拡大などの傾向のなかで、高齢化が進行する漁業・漁村の受ける影響と今後は。

⑤いわゆる「直売ブーム」の光と陰：漁業における「直売ブーム」「地産地消」の現段階の実態と整理にもとづき、個別経営、流通経路、漁協経営、産地加工業、産地市場、消費地市場等への影響と問題点、並びに水産物流通体系と政策展開におけるその意義と限界等について検証する。

事務局からのお願い

1. 学会名簿記載事項についてご連絡を！

現行名簿に変更がある方は、訂正箇所・訂正内容等を事務局宛て、メール又は郵便にてご連絡下さるよう重ねてお願いいたします（特に記入用紙は作成しておりません）。

学会名簿に掲載可能な事項は、氏名及び、勤務先・自宅の、郵便番号、住所、TEL、FAX、メールアドレスです。これらのうち掲載してもよい事項についてのみご連絡下さい。ご連絡がない場合は従来の名簿に変更がないものとみなし、そのまま掲載させていただきます。なお、名簿は次回大会までに作成したいと考えておりますので、春期の移動等が生じた後は、なるべく早めにご連絡ください。

2. 学会誌38号の原稿提出期限について

学会誌第38号の発行は種々の事情でかなり遅れる見込みです。このニューズレターの発行も遅れてしまい申し訳なく思っております。このことを勘案し、次号学会誌の投稿期限も遅らせて2月末までとします。投稿される方は、2月末までに事務局宛、メールないし郵便（FD）で原稿をお送り下さい。なお、メールで投稿される方も、プリントアウトした原稿2部を速やかに郵送して下さい。

<大会印象記>

大会に参加して

清板晃平（東京海洋大学大学院）

“ I Love Obama ”。一時期、巷でも報道されていた、かのキャッチフレーズに一抹の不安と期待を抱えながら、小浜駅に降り立った。今大会は、長い北日本漁業経済学会の歴史の中でも最も西となる福井県小浜市での開催であった。普段、琵琶湖を調査地に行っている私は、大会会場の福井県立大学に何度か訪れたことがあり、久しぶりのこの日を楽しみにしていた。しかし街に着いてみると、前日に吹き去った台風の痕跡が各所に残り、会場へ向かうバスの窓の外に流れる川は濁り、渚には大量の木々が打ち寄せていた。肝心のオバマ熱の方は、支持率も下降傾向を示し始めたせいも、盛り上がりは欠けており、以前の小浜ときほど変わっておらず、ある意味ほっとした。

日本海のカニ資源の漁業管理と地域漁業構造をめぐって繰り広げられたシンポジウムでは、各地の現場に精通する行政関係者による貴重な報告が聞け、普段知ることのできない現場の実態に、より接近できた。それとともに漁業経済分野の研究における今後のカニ資源管理における研究課題や、他分野との協力が必要などころがある程度明らかになった。

特に、日本海のベニズワイガニの場合、資源管理は漁業経営管理にとどまらず、生物学的な個体管理にまでその必要性が及ぶ可能性が示唆された点は非常に興味深かった。そういった意味では、非常に有意義な場が持てたと思う。

しかし一方で、北日本漁業経済学会の持ち味と私が感じ、密かに期待していた、漁業の現場における問題の徹底把握を踏まえた上での、現状の水産政策の批判的検討、施策のあるべき姿の提起、といった方向へ議論が進んだとは言い難かった。今回のシンポジウムのテーマ自体が、かなり独自性・地域性を有し、かつ会場との質疑・応答もそれらへの個別対応に終始しがちだったことが大きいだろうが、昨年の制度改革の議論の流れから TAC および IQ/ITQ を整理し、今回の事例における本質的な論点を探る政策的議論も必要であったのではないだろうか。

ともあれ、私にとって本大会への参加は初めてであり、長年のあこがれでもあった。二日間の経験から多くのものを学んだことは間違いない。ただ、今回は行政関係者の積極的な参加の一方で、いわゆる学会シーズンであったため日程的事情も関係してか、大学関係者の参加が非常に少なかったことが目に付いた。このことが、上述したシンポジウムでの議論の方向性に多少なりと

も影響したことは否めない。

また参加者数の減少に伴い、個別報告者も大変少なく（私も報告したのだが）、個々の報告は非常に興味深いものばかりだったのに対し、質疑がさほど白熱しなかったことは少々残念であった。さらに、これが一番気がかりだったのだが、同世代の参加者・報告者が少ないことに、本学会を含め、この漁業経済分野全体の今後の構造再編（後継者問題？）も考える時期になってきているのではないかと感じた。確かに報告をすることは大変ではある、また、遠隔地の大学からは参加自体が大変であろう。しかし院生・若手研究者がこのような場で活躍しないことには、学会の活性化はありえないだろう。

そのようなことを考えながら、あっという間に過ぎていった二日間だったが、今後は、各地の優れた先達の真摯な研究姿勢に多くを学びながら、堅忍不拔の精神で調査・研究の道に精進することで、自身も研究者としての方向性を確立していきたい、そんな気の引き締まる思いを胸に、同じ時間をともにした皆様との再会を誓い、秋の小浜を後にした。“Yes We Can”でありたい。

北日本漁業経済学会 大会シンポジウムに参加して

瓢雄介（兵庫県但馬水産事務所）

私にとって北日本漁業経済学会への参加は3年連続の3回目であった。一昨年は北海道大学水産学部の4年生として下働きに終始し、昨年は同大学大学院・修士1年として受付係を行いながら会場発表を拝聴した。そして今年、大学院を中退し社会人となった私が学会に参加するとは思ってもよらなかった。所属事務所の課長がシンポジウムで報告をすることに驚き、また、北日本漁業経済学会との縁の深さに引き込まれる思いであった。

シンポジウムの内容、「日本海におけるカニ資源の漁業管理と地域漁業構造」は当事務所が取り組む大きな課題であり、また赴任1年目の私が勉強していくべき問題である。大学時代を勉強は二の次・三の次で生きてきた私にとって、こういった機会に特定の漁業構造・資源管理方策・合意形成過程までも学べることはこの上なく贅沢なことである。今後の職務に反映できるような知識をつけて帰ろう、というのを目的として参加した。

講演の発表内容について、正しい・間違っている、をどうこう言うほどの知識・経験を私が持っているわけもなく、どうしても受け身での参加となった。それぞれの発表は個別には非常に興味深く、特に兵庫県と福井県の事例紹介は直接関係する者として現実味を持って理解できた。ベニズワイガニのIQ制・海外ズワイガニ漁業についても個別の報告としては面白かった。基本知識が足らず理解しきれない部分はあれ、幾分かは身になったように感じ、もう少し深く聞きたいと思う部分が多くあった。

しかし、討論までを含めたシンポジウム全体として見ると、コメント・質問も含めて、ズワイガニ漁業とベニズワイガニ漁業の2つの漁業の中でどこに主論点を置くかに苦労しているように見えた。シンポジウムの報告からは、それぞれの漁業は（実態は全く違うものの）似たようなカニを生産しながら、生産構造・生物特性・消費流通構造が全く違い、さらに地域による違いまでも内包した産業であること。資源管理手法についても、それぞれの漁業の特性や地域事情を含めた、地域漁業のあり方の中で成立していると理解した。これに対し、海外事例や個々の管理手法論がうまく議論として噛み合っただけでこなかったように感じた。多岐にわたる議論の対象の中で、限られた時間で幅広く・かつ深く議論をし、明確な結論を出すことは非常に難しいことだったもの

と思う。

この大会を終えた10月末より私も北日本漁業経済学会の会員となったが、駆け出しの水産畑公務員として、報告する先輩の姿から継続して勉強・研究していくことの大切さを痛感する会であった。懇親会を通じて多くの学会員の先輩方とお話しができ、知識と同時に先輩方との繋がりができたことも大きな収穫だったと感謝しております。兵庫県へお越しの際はお声かけください、そしてまた、よろしくご指導ください。

北日本漁業経済学会事務局（事務局長；宮澤晴彦）

〒060-8589 札幌市北区北9条西9丁目

北海道大学大学院農学院 水産資源経営学分野

TEL/FAX 011-706-4139

〒041-8611 函館市港町3-1-1

北海道大学水産学部 海洋社会科学分野

TEL 0138-40-8834 FAX 0138-40-8835

E-mail miyazawa@fish.hokudai.ac.jp

*事務局は札幌に移転しましたが、函館に郵便物を送られても届きます（返送されることはありません）。メールアドレスは従来通りです。

総会資料(会計)

会員現勢(2009年9月末現在)

区分	会員数	本年度 退会者
個人会員	148	12
団体会員	20	2
合計	168	14

2008年度新規加入会員(個人10名・団体0)

区分	氏名等		
個人	鴨下真吾	濱津友紀	末永芳美
	棧敷孝浩	神忠志	中村彰男
	佐藤尚紀	黄騰正	滑板晃平
	佐々木稔基		

2008年度 決算 (2008年10月1日～2009年9月30日)

(円)

収入の部					支出の部				
科目	内訳	決算額	予算額	備考	科目	決算額	予算額	備考	
会費	個人	487,000	733,000		印刷費	1,013,300	800,000	会誌・封筒等	
	団体	320,000	310,000			人件費	7,000	50,000	発送作業人件費
	小計	807,000	1,043,000			郵送費	86,996	90,000	短信・学会誌
会誌等販売	定期	0	20,000	学術フォーラムから	事務費	15,356	50,000	消耗品費等	
	バックナンバー	1,000	10,000		その他	315	0	振込み手数料	
	その他	1,100	0	大会当日販売分	小計	1,122,967	990,000		
	小計	2,100	30,000						
雑収入		964		利子・利息					
特別会計 から繰入		202,275			特別会計へ 繰入	100,000	100,000		
前期繰越金		2,132,862		昨年度会計より	次期繰越金	1,922,234			
計		3,145,201				3,145,201			

次期繰越金内訳(円)	郵便局	銀行	現金	合計
	1,521,665	376,788	23,781	1,922,234

2008年度大会関係特別会計決算報告

(円)

科目(収入)		備考	科目(支出)		備考
一般会計 から繰入	100,000	昨年度会計より	講師謝金・旅費補助	74,320	会員外講師 シンポジウム招聘旅費
資料費	54,000	54名分	懇親会費	94,200	
懇親会費	108,000	27名分	消耗品費	6,287	文具、コピー代
			会議費	510	
協賛金	100,000	北海道漁業協同組合連合会	事務費	18,258	シンポ報告者・事務局弁当
助成金	80,000	北海学園大学	郵送費	3,100	理事会召集はがき代等
			印刷費	43,050	要旨集印刷費
			小計	239,725	
			一般会計繰入	202,275	
計	442,000		計	442,000	

注: 2008年度 札幌大会(北日本漁業経済学会第37回大会)に関する収支

2009年度 予算

(円)

収入の部			支出の部		
科目	金額	備考	科目	金額	備考
会費収入(個人)	722,000	148人(内学生9名)	印刷費	800,000	学会誌第38号、封筒等
会費収入(団体)	310,000	20団体	郵送費	90,000	短信・ニュースレター
会誌販売(定期)	10,000		人件費	50,000	
会誌販売(臨時)	5,000		事務費	50,000	消耗品費、会費等
			特別会計へ繰入	100,000	大会特別
小計	1,047,000		小計	1,090,000	
前期繰越金	1,922,234		次期繰越金	1,879,234	
計	2,969,234		計	2,969,234	

注)年会費:一般5000円、学生3000円、団体1口10000円(10口1団体含む)